

中世の国際都市 堺

Sakai, the international city prospered from 15th thru 17th

—考古学から見た堺環濠都市遺跡—

—“Sakai Kango Toshi Site” in archaeological aspects—

續 伸一郎

Tsuzuki Shin-ichirou

堺市教育委員会 埋蔵文化財センター, 堺市稲葉1丁 3142

Sakai City Board of Education, 3142 Inaba-1cho Sakai-shi Osaka

あらまし：戦国時代に繁栄した堺は、歴史上著名ではあるがその実像は不明な点が多かった。しかし、約30年間に及ぶ発掘調査により具体的な姿が見え始めている。堺は砂堆上に立地し「街道・海道」の結節点であったが、遣明船入港以後に堀列建物＝蔵が登場してからは「貯蔵」機能が付加され、国内有数の「物流拠点」として繁栄した。16世紀末から17世紀初頭にかけては、国産・外国産共に陶磁器全般の出土量が増えるが、特に中国南部やベトナム・タイなどの東南アジア産の貯蔵容器（壺・甕）が顕著であり、内容物と共に搬入されると考えられる。そして、堺衆達はその中から後に「南蛮」と呼ばれる茶陶を見出したと考えられる。また、彼らは屋敷地内に茶の湯と連歌を行う蔵座敷を建て、当時最新流行の茶陶を購入していたことが調査事例からも検証されている。そこから出土した茶陶の組成（取り合わせ）は各調査地点で微妙に異なっており、各所有者の「好み」を表していると推測される。

Summary: Sakai was the historical city, having prospered during Sengoku period (from 15th thru 17th). So far, there were not so many facts to prove its specialty. But these 30 year's investigation could make it clear what the city had been like. Situated on the sand-bank. It had played an important role as a connection between "land-road" and "sea-road" before the advent of *Kura* (The function of *Kura* was to store things.) The growth of *Kura* turned Sakai into one of the best prominent trading bases. The end of 16th to the beginning of 17th century. Number of potteries (including imports from such as China, Vietnam, Thailand) had been excavated. Most of which seemed to have been used for storage. The masses judged some potteries called *Nanban* among them. While collecting any kinds of potteries, they also prepared *Kurazashiki* to enjoy *cha-no-yu* (a tea ceremony) and *renga* in their residential area. May be, excavated potteries in each area shows the owner's favorites.

キーワード：砂堆、貯蔵、蔵座敷、茶陶

Keywords: sand-bank, storage, tea ceremony wares

1. よみがえる中世都市 堺

戦国時代の堺は、「日本最大市のひとつなる自由都市」として繁栄していた。天文18年(1549)に来日したザビエルは「堺という町には裕福な商人がたくさん住んでいる。そして他のいかなる日本の地方もおよばないくらいに、そこへ金銀が流れ込んでいる」と書き残している。

ところが、慶長20年(1615年)4月28日に大坂夏の陣の前哨戦として、豊臣方の大野道犬により放火され町のほぼ全域が炎上・焼失する。この火災の状況は悲惨を極め、「此悲しむべき火災の為、二万の家屋は火に嘗められ、其夜大坂に於いては、火の海より多量の火災の天に昇るが如く見えた」と宣教師は書き残している。

これ以後、徳川幕府による整地作業などの復興

事業と町の拡充・濠の付け替えなどの都市大改造が行われて、「元禄二年(1689)堺大絵図」に描かれたような長方形街区と短冊形地割をもつ新しい近



堺環濠都市遺跡を望む（南から）

世都市として復興する。この段階で中世期の町は破壊・除却され完全に消滅したと思われてきた。焼失より84年後の元禄12年(1699)には「往古ノ町並、只今ノ様ニ筋通り申サズ、東方公田ヲ堺町中ニ入ラレ町家ニナル、(中略)是ヲ以テ見ルニ、田地ヲ町家へ取入レタリト知ベシ、混雑多クシテ今ニテハ諸事考へ難シ」(『全堺詳誌』)というような漠然とした記憶しかなかったのである。

このように戦国時代の堺は、歴史上著名ではあるがその実像は不明な”幻の都市”であった。

ところが、昭和49年(1974)4月から始まった堺市内の埋蔵文化財試掘調査により、現在の都市の地表面より約1m~4m下に建物・道路・堀などの中世期の遺構や瓦・陶磁器などの遺物が発見された。そこには火災・津波などによる災害の痕跡層とその上に土で整地して建物などを復興した面とが交互に繰り返し見られ、およそ14世紀後半から17世紀初頭にかけての町の災害と復興の歴史が土中にパックされた状態で残っていたのである。昭和52年(1977)3月には文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化包蔵地「堺自由都市跡」として登録され、その後「堺中近世都市環濠遺跡」と改称され昭和55年(1980)には現在の名称「堺環濠都市遺跡(遺跡略号SKT・数字は調査次数を表す)」となっている。

調査開始以来約30年間経て約900件に及ぶ発掘調査成果により、繁栄していた当時の町の様子や人々の生活文化が除々ではあるが、具体的な姿を見せ始めている。以下、その事例を紹介して往時の都市空間・風景を再現することとしたい

2. 海と陸の結節点一堺の立地

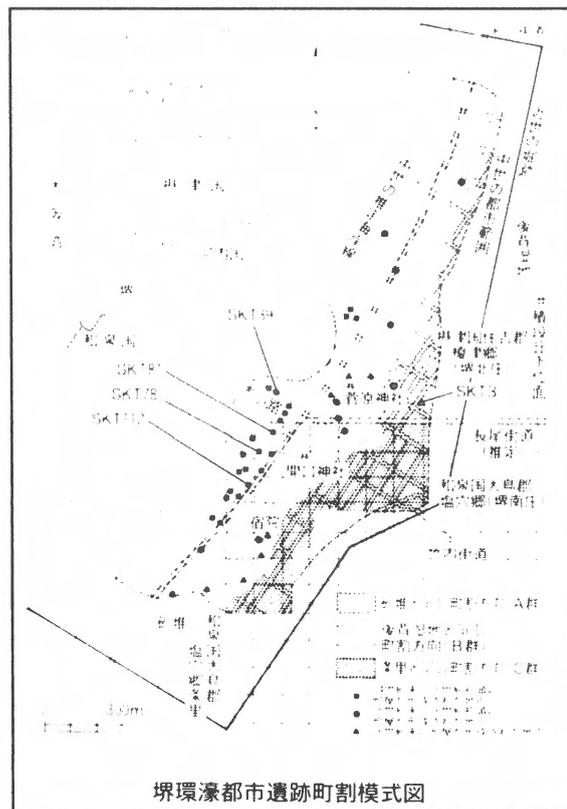
堺の町は、偏西風により吹き寄せられた砂堆上に形成され、和泉・摂津・河内の三国の境界に位置している。町の南北を幹線道路である大道(紀州街道・熊野街道)が縦断して、町の中央で東西方向に分岐するのが大小路であり、この道が堺北庄{摂津国住吉郡朴(榎)津郷}と堺南庄{和泉国大鳥郡塩穴郷}との境界線となり、花田口から反正天皇陵・方違神社がある田出井町の北方を東進し、松原市から羽曳野市を経由して大和(奈良県)へ至る長尾街道(大津道)につながっていた。これら各街道の先には大

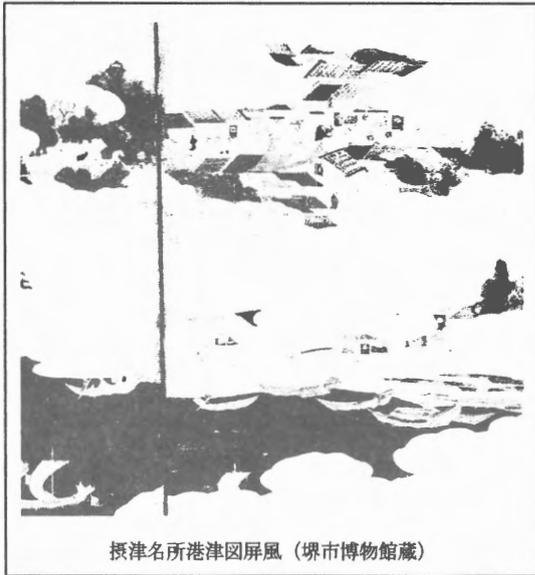
坂・京都、奈良、高野山などの一大消費都市が存在する。

堺の津は平安時代末から鎌倉時代には河内丹南に居住する廻船鋳物師(諸国で梵鐘製造及び多面的な商業活動を行う集団)の拠点港として記録に登場し、応仁の乱後の文明元年(1469)以降は遣明船が、慶長以降は朱印船が出入港する。

筆者は10年程前に堺環濠都市遺跡の空間構造と町屋の構造的長・時代別の変遷について考え、概念的な「場」の設定を行った。それは、建物・遺構主軸方向により町が大きく3グループに分類し、立地する土地条件により町屋が集住する「市」と農耕地の広がる「農」とが並存する二層の空間構成が復元され、屋敷地などの開発に関しては空閑地である裏地の克服・開発がキーワードをもつと考えた[續1994]。また、都市内には商家のみではなく、便所を「表」にもつ間口の小さな住居が混在しており、農人と職人が居住していたことも明らかになっている。

ところで、堺と言えば、「南蛮図屏風」に描かれたように大型船が港に着岸し、商人が異国人と直接交易を行っていたというイメージがあるが、現実には白砂青松の海岸が続く遠浅の砂浜であった。17世紀前半頃の風景に描かれたとされる『摂津名





摂津名所港津図屏風（堺市博物館蔵）

所港津図屏風』には沖に帆船・砂浜に小船が描かれており、また他の湊のように大規模な河川の河口に位置していたのでもなく「船少しも懸かり候はず」と言われたように港湾機能は必ずしも良くなかったのである。また、都市内部に存在した環濠を運河と考えて「ベニス」のように小型船が積荷を町内の蔵まで運んだという説もあるが、調査で確認される濠の底面レベル高低差が最大で2.5mもあり、川状でなければ貯水するには堰が必要になるために濠が運河として機能していたとは考えられない。〔續 2003〕

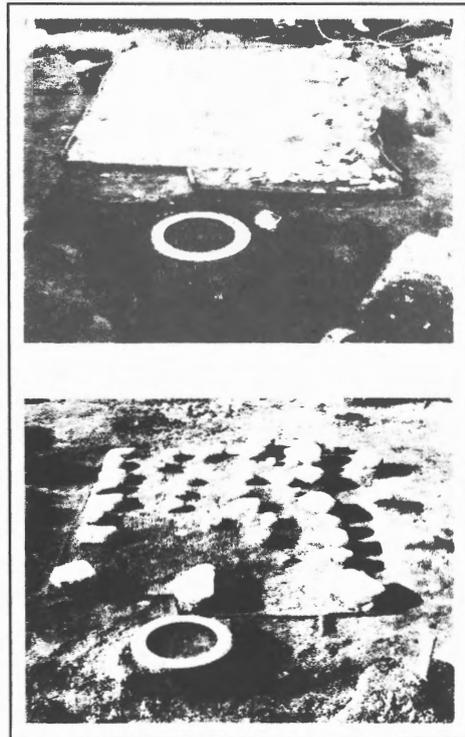
それでは、天然の良港ではなく都市内での水運機能も未発達だった堺が中世後期には日本列島を代表する港市として大量の物資が流入した背景には一体何があるのでしょうか。そこには、国際的な「海の道」を媒介とした海道の子結節点であり京都・奈良などに繋がる街道の交差・結節点でもあったという地理的・歴史的な側面と共に堺が併せ持っていた「貯蔵」という機能も留意すべきであろう。〔續 2004〕



3. 富の視覚的シンボルー蔵（埴列建物）

古代では収穫物を収納・蓄積する蔵(倉庫)は、大王あるいは地方有力首長に関連する権力の象徴(シンボル)であり、近世には商家の富の象徴(シンボル)でもあった。では中世ではどのように機能していたのであろうか。〔續 1999〕

堺環濠都市遺跡では、埴列建物が蔵であったと考えられる。この埴列建物とは、建物平面プランを埴(長さ 27.0~29.0cm×23.0cm 厚さ 2.0cm~2.3cm・平瓦に類似)で囲った建物跡を総称して呼んでいる。埴は1/3程度を地表面上に露出させ、下段の1~3枚を縦積みで土中に埋没させる。床面内部は、黄褐色粘土などで貼床されて埴に沿って「ロ」字状に連続して礎石を配し、この上に土台の角材を置き、それに柱・大壁を取り付けて立ち上げている。床は土間もしくは転根太の場合が多いが、貼床下及び床面には湿気除けの貝が充填される例もある。この建物は、寺社建築のように柱・束で軸組を造るのではなく四周の壁土で自立する壁構造であり、規模等から蔵と考えられる。そして、この埴は基礎と土壁の立ち上がり部分を雨風・動物などから守る用途として採用されたと考えられ、堺以外では京都や畿内の城館で同様の建物が確認されているが件数は少なく堺を中心として独自に普及・発達した建造物と思われる。



埴列建物

博列建物は、堺で遣明船交易の始まった15世紀後半頃に初出し、表通りに面した礎石建物の奥に建てられる。16世紀中頃までは数軒単位で1棟の博列建物を所有していたが、16世紀末頃には1軒で3～5棟の博列建物を所有するようになり、町の発展・都市化と共に軒数が増大する傾向が認められる。海岸線沿いに蔵が林立する姿は各地域との「交易」の活発さを物語ると同時に、堺商人がもつ富の象徴であり都市のランドマークでもあった。言い換えると、戦乱の及ばない自治都市であった堺の町全体が、戦火の多い京都など各都市の「蔵」=ストックヤードとして機能していたのかもしれない。興味深いことに、慶長20年(1615)の焼失後に復興された近世都市では蔵に博列建物は採用されず、まさに中世都市と盛衰を共にしている。この「貯蔵」機能こそが、堺の最も重要な都市機能だったと考えられる。

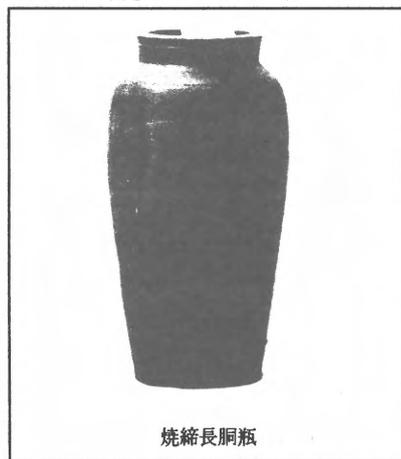
ところで、慶長年間頃になると建物の床面が地表面より約30cm程度掘り下げられた半地下構造の博列建物が登場する。現在まで出土件数は約10例と少ないが、この建物は従来のそれと比較して本瓦葺・転根太・壁土も厚く高価な収納物が多い点が指摘でき、工法的には近世城郭建築の技法伝搬により構築された三階蔵である可能性が高いと考えられる。会合衆クラスの豪商が所有していたと推測され、博列建物の究極の進化形体といえよう。

これら博列建物の中には、各地域から運ばれた多量の交易品が貯蔵されていた。〔續 2001〕

特に16世紀末～17世紀初頭の慶長年間頃(1596～1615)は貿易・国産陶磁器共に出土量が増大し、産地・器種構成が多様化する時期に相当する。また、朱印船貿易により東南アジア・朝鮮・中国陶磁器の出土量が倍増している。中国陶磁では、景德鎮窯系以外に粗製品とされる福建省漳州窯系の染付が増加する。また、朝鮮(李朝)陶磁の出土量も増えて、碗皿類以外に大型の盤や貯蔵器(甕・瓶)の出土量も増加する傾向が認められる。なかでも、壺・甕(貯蔵具)は内容物と共に容器として搬入された結果と考えられ、その生産地が特定されれば交易・流通相手を探る物的証拠品として重要である。では次に、この時期に数多く出土するベトナム陶磁を例にして検討してみたい。

4. 焼締長胴瓶の故郷—ベトナム

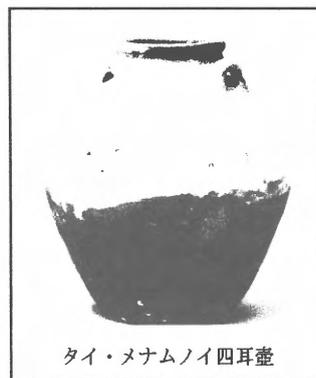
堺環濠都市遺跡から出土したベトナム陶磁器は、14世紀後半代に1点と17世紀後半代から5点出土しているが、それ以外は16世紀末～17世紀初頭に集中して出土している。この時期の堺環濠都市遺跡における出土陶磁器(碗・皿)の組成は、貿易陶磁では中国製が95%以上、朝鮮(李朝)製が3%程度を占めている。そのような中でベトナム製は僅か1%未満と低く、あくまでも希少価値が高く特別な陶磁器、所謂「珍品」として理解され使用されていたと思われる。〔タイ製品も同様であり、宋胡録香合(SKT80他)・ハンネラ壺(SKT214他)など限定される。〕なお、これと同様な組成は堺だけではなく博多・大坂でも認められており、



焼締長胴瓶



焼締鉢 (ノ切建水)



タイ・メナムノイ四耳壺

同時期の大都市に於ける共通した組成と考えられる。茶会記によると少なくとも16世紀後半頃には「南蛮」と称された陶器が使用されていたとされる。遺構からの出土状況より考えると、焼締鉢や焼締筒形鉢は茶陶として意識的購入・使用されていたと考えられる。

また、数量的には飲食器の碗・皿類よりも貯蔵具である焼締長胴瓶の方が圧倒的に多いことが指摘できる。ただし、これは容器（焼締陶器）ではなくて、その中身（内容物）が大量に輸入された結果であると思われる。この長胴瓶は、茶陶の伝世品である「南蛮切溜花入」として伝世しているが、その型式からみて少なくとも17世紀後半から18世紀頃に生産されたと思われ、その後に茶人等の「見立て」により茶陶へと選択されていったとも考えられる。この長胴瓶は中部ベトナム産が多く、北部ベトナム産は出土点数が少ないことから、おそらく中部ベトナムの特産品が充填され、それが堺へ搬入されていたと推測される。その内容物については、水銀・砂糖・糖蜜などの説もあるが、水銀については容積量に比して重量が非常に大きいことから焼物である長胴瓶での運搬は困難と思われる。残念ながら、長胴瓶の内面に顕著な付着物等はなく、また科学分析も行われていないので、これ以上の解明はまだできていない。

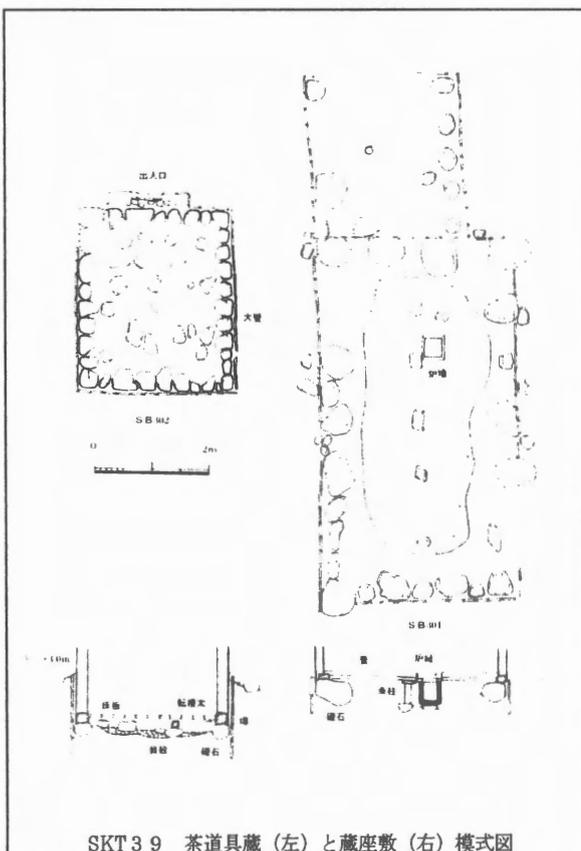
ところで、堺環濠都市遺跡では長胴瓶とタイ製焼締四耳壺（メナム ノイ窯等のイリノイ川系）が共に出土する例が多く、この傾向は17世紀中頃の大坂城下町遺跡でも認められる。また、興味深い事にタイ製焼締四耳壺は中部ベトナムのホイアン（ディン・カムフォー第2トレンチ）からも出土しており、この長胴瓶と共に四耳壺は16世紀末～17世紀初頭の朱印船等の渡航ルートや輸入品を解明する上で重要な鍵となると思われる。〔續 2003〕

5. 交流を物語る陶磁器—茶陶

日本に45年間も滞在した宣教師ト・リ・ガスは「数寄と呼ばれるこの新しい茶の湯の様式は、有名で富裕な堺の都市に始まった」と評している。堺は、武野紹鷗や千利休・津田宗及などに代表される茶人・数寄者を多数輩出しており、納屋衆と呼ばれた豪商達は、屋敷内に茶湯空間を積極的に作り出し、豊富な財力を背景に多様な陶

磁器類を購入していた。当時の茶の湯世界を彷彿とさせる茶道具類も多く出土しているが、出土した茶陶はいわゆる「名物」として長い間に淘汰・伝世された茶陶とは異なり、出土した地点や遺構から使用した年代や状況が推測可能なために当時行われた茶の湯を再現する資料として注目される。

堺では草庵茶室の出土例は少なく、慶長期では蔵座敷の方が多く確認されている。熊野町東二丁（SKT39）では、炉壇を備えた蔵座敷と隣接する博列建物（茶道具蔵）が発見され、多種多様な茶陶が出土している。また、甲斐町西二丁（SKT47）では蔵座敷の内部から数寄屋建築の壁材である大坂赤壁が出土している。このような蔵座敷は、茶会や連



SKT39 茶道具蔵（左）と蔵座敷（右）模式図



SKT39 他道具蔵出土遺物

歌会も催される「数寄座敷」として使用されていたと思われ、炉壇を設置するために建物中央地面を凹ますのが特徴である。

さて、慶長20年(1615)に被災した焼土層から出土する茶陶には国産陶器では唐津、備前、美濃・志野・織部、信楽・伊賀、丹波、楽系(軟質施釉陶)、また貿易陶磁器では中国(青花・白磁・青磁・赤絵・五彩・華南三彩)、朝鮮、東南アジア(タイ・ベトナム・ミャンマー)などがある。このように茶陶は東アジアの海を介して運ばれた有形・無形の交流ネットワークを具象化したものでもあった。全般的に三〜七客単位で出土する向付・皿・杯・盤などの懷石道具(供膳具)の占める割合が多く、出土点数では中国陶磁器(青花・白磁)の方が国産陶器より多く出土する傾向があり、このことから青花を主として黄瀬戸、志野、唐津、織部を組合せて使用していたと想像される。なお、青花全般では精製の景徳鎮窯系より粗製の漳州窯系の方が多く出土し、古染付など注文品も出土している。茶碗は、意外な事に天目茶碗や楽系、瀬戸黒は少なく、青花、朝鮮や志野・織部、唐津が多く出土し、長次郎の作風とは異なる作風や轆轤を使用した黒楽系茶碗、軟質施釉陶である白地緑彩陶もごく少量見られ、またこの時期に大流行する織部に代表される「歪みたる茶碗」も取り立てているものの出土点数は少ない。なかには15世紀代の中国青磁碗や酒会壺、李朝青白磁・粉青沙器など伝世した骨董品の使用も認められる。また、朝鮮絵垣文彫三島茶碗は焼土層の年代からその下限を押さえられ、16世紀末〜17世紀初頭に作られていたことが考古学的にも実証された。茶入では、「名物」とされた唐物茶入は殆どなく美濃が多く出土しており、もしかしたら被災前に持ち出されたかもしれない。茶壺では呂宋壺はより中国製褐釉四耳壺か信楽壺が、水指では一重口が美濃、備前、矢筈口では備

前、唐津、信楽鬼桶や歪みをつけた伊賀などが出土している。このように各調査地点で微妙に異なる茶陶の組成は、その所有者・亭主の「好み」の相異を明確に表現したものと考えられる。出土した茶陶に見られる画一的ではない「多様性」がまさに桃山という時代性を色濃く反映したものと思われる。多量の物資が流入する堺で磨かれた「目利き」と「見立て」感性が大いに発揮された結果であり、多くの茶人を輩出した原動力でもあった。

4. さいごに

以上、発掘調査データから堺環濠都市遺跡について検討してみた。しかし、蓄積された膨大な情報量は景観復元作業を逆に困難としていると思われる。つまり、「人・モノ・空間」相互の関係が情報化されていないのである〔小野 1995〕。また、都市の定義が曖昧なまま、全国的に「都市」・「都市的な場」が増えている。今こそ中世都市とは何であるかが問われていると思われる。10年前に提唱された各学問分野の「学際的」研究が、現在は「総合資料学」・「学融合」〔前川 2003〕へと変化している。今後の研究の深化に期待したい。

文献：

高志芝巖・養浩

宝暦7年(1757)『全堺詳誌』

小野正敏

1995 「中世の考古資料」『岩波講座日本通史』別刊3

續 伸一郎

1994 「中世都市 堺—都市空間とその構造—」『中世都市研究Ⅰ都市空間』 中世都市研究会

1999 「収納する場としての蔵-堺環濠都市遺跡の事例を中心として-」『地方史研究』281 地方史研究会

2001 「堺の町と町屋」『考古学発掘資料による建物の復元方法に関する基礎的研究』科研費研究成果報告書

2002 「堺環濠都市遺跡出土のベトナム陶磁器」『近世日越交流史』櫻井清彦・菊地誠一編

2003 「戦国時代の自治都市 堺」『戦国時代の考古学』小野正敏・萩原三雄編

2004 「堺商人の世界—蔵・茶の湯—」『第45回歴博フォーラム中世の湊町 行き交う人々と商品』国立歴史民俗博物館

前川要

2003 『中世総合資料学の提唱—中世考古学の現状と課題—』新人物往来社